阿房列車の車輪の音

内田百閒

阿房列車の車輪の音

昭和55年1月25日　初版発行
昭和55年3月10日　二刷発行

著　者　内田百閒
発行者　賀來壽一
発行所　株式会社　六興出版
東京都文京区水道二―九―二
郵便番号　一一二
電話　03(943)3431
振替　東京1-92448
印刷　株式会社　三秀舎
製本　中央精版印刷株式会社

© 1980 Uchida
落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0095-07045-9216

阿房列車 本文ノ扉

鐵道唱歌 第二集終節

六七（長崎ノ續キ）前は海原はてもなく
外つ國までもつゞくらん
あとは鐵道一すぢに
まなゝくひまよ青森も

六八 あしたは花の嵐山
ゆふべは月の筑紫潟
かしこも樂しこゝもよし
いざ見てめぐれ汽車の友

阿房列車の車輪の音

内田百閒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

阿房列車の車輪の音　目次

一等車……11
風稿録……15
非常汽笛……20
汽笛一声……29
鉄道館漫記……35
戻り道……41
通過列車……44
初乗り……49
寝臺車……52
洋燈と毛布……55
乗り遅れ……58
その時分……62

先年の急行列車……69
列車食堂……74
定期券乗客……79
時は変改す……83
雷九州日記……113
高知鳴門旅日記……121
八代紀行……126
千丁の柳……141
臨時停車……169
沿線の広告……190
山むらさきに……193
車窓の稲光り……207

阿房列車の車輪の音……211
逆撫での阿房列車……216
阿房列車の周辺　平山三郎……229

装丁及びカット・山高　登

阿房列車の車輪の音

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

一等車

私は汽車の一等に乗つた事がないから、乗つてみようと思ひ立つて、上野から仙臺までの白切符を買つた。但し、その当時、私は陸軍と海軍の学校の先生をしてゐたから、切符は官用の半額である。だから、実は二等の切符よりもやすかつたのだけれど、急行券には割引がないから高い。さうして午後一時発の急行に乗り込んだ。

著物は祖母の著古した、蚊帳の様な色の帷子を素肌に著て、朴歯の下駄を穿き、青いズツクを張つた小さな手鞄を一つ携へた。ズツクの色が褪せて、少し黄色に変はりかけてゐる。形が古風で、素麺櫃に手をつけた様だつた。それを自分でさげて行つてもいいけれど、赤帽と云ふ者があるのだから、赤帽に持たせた。

一等車は、列車の真ん中にあつて、半分は廊下のついた寝臺車に仕切り、半分は昔風に座席が窓に沿つて長く伸びてゐた。私はその長い座席の真ん中の辺りに坐つて、何となく、ほつとした。夏の事だから、窓には金網の紗が張つてある。その所為で、車室の中は少し薄暗くて、

どことなく荘厳な感じがした。

発車する迄、到頭だれも這入つて来なかつた。私は広い車室に一人ぽつねんと居て、益一等に乗つた様な気持になりだした。汽車が走り出してから、暫らくすると、年増のボイが這入つて来て、私の前を丁寧に腰をかがめて通り過ぎたと思つたら、直ぐに帰つて来て、私の足許にスリツパを置いてくれた。私がそれに穿きかへると、ボイは待つてゐた様に私の下駄を傍にそろへた上で、又丁寧なお辞儀をして去つた。下駄の表に、大きな足の親指の痕が、左右相対の位置に黒くついてゐるのが気になつた。

一等車の紗張りの窓から見る外の景色は美しかつた。白い田舎道を、真赤に見える帯をしめた女が一人、尤もらしく歩いて行つた。向うの山裾を裸馬が一匹、無闇に走つてゐる。車掌が這入つて来て、入口で脱帽して、私の前を通り過ぎた。車掌が食堂車を通る時に、帽子を手に持つて行くのは知つてゐるけれども、普通の車室で脱帽するのは始めて見たから、不思議な気持がした。

隣りの寝臺車に、どんな人が乗つてゐるのだらうと思つて、仕切りの扉を開けて、廊下をぶらぶら歩いて行つた。寝室はみんな開けつ放してあつて、だれもゐなかつた。一番向うの端に人の気配がするから、その前まで行つて見ようと思つたら、不意にボイが廊下に出て来て、何か御用で御座いますかと云ふ風にお辞儀をしたので困つてしまつて、そのままもとの席に帰つ

て来た。

どこかの駅で汽車が停まつた時、駅長さんが丁度私の車室の前に起つてゐて、紗の窓を通して中を見る様な、見ない様な風をした。さつきのボイが駅長さんの傍に行つて、何か話し出した。どうも私の事を云つてゐるらしい。脚を蚊が食つたから、平手でふくらつぱみを叩いたら、大げさな音が車内に響き渡つた。

また汽車が動き出してから、暫らくすると、ボイが枕と、薄い毛布の様な物を持つて来て、「お退屈さまで御座いませう。少しお休みなさいましては」と云つて、枕を座席の上に置いた。

段段つまらなくなつて、少し眠くなりかけてゐたのだけれど、そんな事をされると、また気が立つて、目が醒めてしまつた。しかし、ボイがそこに起つて、待つてゐるから、仕方なしに私は横になつて、枕に頭をあてた。ボイが足の方に毛布をかけてくれて、何処で下りるかと尋ねるから、仙臺までと答へた。

ボイが行つてしまつた後、私はいつまでも天井や、窓から斜に見あげる空を眺めてゐた。ちつとも眠くなんかならない。何となく寝てゐるのも窮屈になつて来たから、足の毛布を蹴飛ばして、起きてしまつた。

車掌が何度も私の前を通つたから、その内に検札に来るかと思つたけれど、到頭来なかつた。一等のお客には、そんな失礼な事はしないのだらう。

仙臺に著いたから、降りようと思つてゐると、ボイが這入つて来て、いきなり私のズツクの鞄を携げて出て行つた。さうして、汽車が止まるか止まらないかに、プラツトフオームに飛び下りて、鞄を携げたまま、改札口に馳けて行つた。鞄をそこに置いて、改札の駅員と何か話してゐる。「変な奴が乗つてゐるんだけれど、ここを出て行く時、切符をよく調べてくれ」と云つたのではないか知ら。ボイが帰つて来て、まだうろうろしてゐる私に、「お鞄は改札まで持つて参つておきました」と云ふものだから、仕方なしに五十銭やつた。改札を出たら、大きな欠伸が続け様に出て、涙がぽろぽろとこぼれた。

風稿録

先般、私の俳句集を上木して、うれしくもあり、また余計な事をした様な気がかりもあつて、何となく後の気持が曖昧である。

一体、俳句と云ふものは、詠み捨てておけばいいものである。そんな事を云ふと、斯界の専門家が承服しないかも知れないが、しかし俳句が余技であると云ふ意味ではないので、余技も本職もなく、抑も作者の署名などと云ふ、思ひ切りの悪い添へ書きなんか、ない方がいい様な気がするのである。

川柳はさう云ふ点で、俳句よりも一足先に出てゐるのではないかと思ふ。居候三杯目にはそつと出しの作者を、私共は知らないのである。芭蕉、蕪村の名の伝はつてゐることは有り難い事だと思ふけれど、また一方に、緑亭川柳、人見周助等の名前が一般には知られてゐない事も、うれしい事である。起きて見つ寝て見つ蚊帳のひろさ哉が加賀千代女の作であることは、何人でも知つてゐるが、お千代さん蚊帳がひろけりや這入らうかの作者が誰であるかの穿鑿などは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb